

自然選択の単位の問題について

～ 遺伝子選択主義と文脈依存性～ (サブタイトル)

東海大学 松本 俊吉

自然選択の単位の問題をめぐっては、1960年代に動物の利他行動の解釈をめぐってダーウィンの個体選択主義にウィネ＝エドワーズが集団選択の考え方を対置して以来論争が継続しているが、特に今日においてはウィリアムズ、ドーキンスの提起した遺伝子選択主義の普遍的適用可能性の問題が一つの焦点になっている。すなわち、自然界におけるあらゆる選択過程は原理的に単一遺伝子の視点から記述可能であるとする遺伝子選択一元論の立場と、生物的自然の階層構造によって与えられる多元的な選択のレベルをケース・バイ・ケースで使い分けるべきだとする立場との論争である。本発表では、この単一遺伝子選択主義の妥当性を考察する一つのケーススタディとして、ヘテロ接合子優越 (heterozygote superiority) の事例をいかに解釈すべきかをめぐって近年ソーバーとシュテレルニー／キッチャーの間で米国の *The Journal of Philosophy* 誌上でなされた論争を吟味する。ソーバーが「一様因果的効力の原理」を要請し、単一遺伝子 (もしくは対立遺伝子) のレベルではなく遺伝子型 (もしくはそれに対応する表現型) のレベルに一義的な適応度を付与することによって初めてヘテロ接合子優越の事例が理解可能となると主張するのに対し、シュテレルニー／キッチャーは「頻度依存型選択」の概念を導入することによってヘテロ接合子優越の事例においても単一遺伝子に 文脈依存的にはあるが 一義的な適応度を付与し得ると主張する。彼らの論争を評価する一つの可能性としては、「選択の単位」の用語法についてのロイドの分析を援用して、彼らが「選択の単位」という概念をそれぞれ異なる意味で理解しているためにそれは原理的に解決不可能だとみなすものがある。けれども発表者は、選択の単位の問題は単なる記述可能性の次元を越えた、当該の選択過程を引き起こす原因となる性質をめぐるとする実在論的な考察を必要とするという立場から、より積極的にソーバーの立場を擁護しようとする。